

図書紹介

高金亮監修 『中医基本用語辞典』

日本TCM研究所 安井廣迪

日本の漢方医学と中国の中医には非常に大きな相違がある。約40年前に日本で行われていた曲直瀬流の医学は、今では忘れ去られたようになっていた。かつてはこれが日本の漢方医学の標準理論体系を持っていた。かつてはこれが日本の漢方医学の標準であったのである。しかし、この曲直瀬流の医学の本を読んで理解できる人が果たしてどれだけの数であろうか。読めない最大の理由は、用いられている術語の意味が分からないということであろう。かつては医学用語としても日常用語としても、ごく普通に使われていたこれらの語彙は、日本の漢方医学を実践・研究している人にとって、摩訶不思議な言葉として映るであろう。中医には、当然ながら曲直瀬流によく似た用語が存在する。こちらは、現在の中国の医療や医学教育の場で日常に使用されているものである。英語を始め諸外国の言葉にも翻訳されており、もはや国際的にも標準の学術用語となりつつある。中医用語は、すでにある程度日本に定着した感があるが、日本東洋

いたのであろうか。

本書は、約三五〇語の中医学用語を収録し、それぞれの意味するところを記述する。日本漢方の用語に関しては、中医学用語と共通するもの以外はほとんど含まれていない。各項目の記述は、執筆に当たった若手の研究者の意気込みを感じさせるもので、きわめて詳細である。項目の内容は、中医学的な生理解剖学・病名・証候名・病因機・治法・鍼灸などに関する各用語で、それらを50音順に記述・解説する。本書の作成に際し、東洋学術出版社の編集陣は、本書が出来ただけ読みやすくするようにさまざまな工夫を凝らしている。それは凡例に詳しく書かれているが、概要を紹介すると以下のようである。まず、50音順に書かれた見出し語の後に、関連する子見出し語が解説と共に附され、更はその関連の語が孫見出し語として書かれている。子見出し、孫見出しの語のタイトルは、それぞれ50音順の見出し語のところに配列されているため、こちらから引くことも出来る。便利であると同時に、数ページを読むだけである程度まとまった知識が得られるのはうれしい。また、全ての語に読み仮名が付されている。中医学用語の発音はまだ日本で定着していないし、これからも統一するのは難しいと思われるが、本書では、これまでの経験に基づき、適切に読み方を提供している。季刊誌『中医臨床』の27年の歴史の重みがここに感じられる。

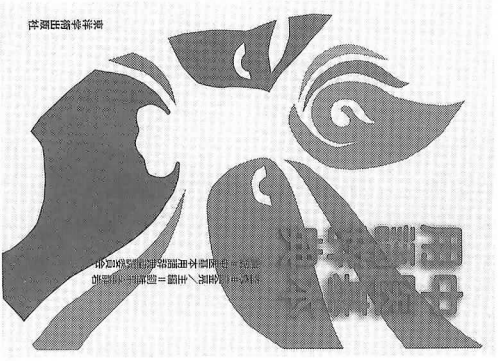
生薬、処方、経穴など、用語によっては本文中に入れないで別枠で記述したほうが良い場合がある。それらは付録として巻末に一括して記載されている。①同義語集、②中国医学史年表、③五行分類表、④中薬一覽表、⑤方剂一覽表、⑥度量衡換算表、⑦十二経脈図、⑧奇経八脈図、⑨身体図の9項目である。索引も充実していて、総索引のほか、分類索引と画数索引が付されている。

執筆者は、いずれも、現在第一線で活躍中の中医師である。監修に当たられた高金亮先生は、天津中医学院院长、天津中医薬研究院院長を歴任され、現在は天津現代脾胃病医院の院長として診療・研究に多忙な生活を送っておられる。この辞書は、高金亮先生をトップとする同門の人たちによって編纂された。内容の長短はさまざまでも、記載の方式に一貫性のあるのは、そういう理由によるものであろう。

翻訳に当たられた人たちは、それぞれの分野で活躍しておられるのみならず、翻訳のベテランの方ばかりである。読みやすさ、辞典に欠点があるとすれば、それは解説が詳しくすぎることであろうか。辞典の記述が詳しいのは重要なことである。詳しくければより深くその内容を理解することが出来るからである。しかし、簡潔にそれを理解しようとするとき、煩雑な記述はかえって邪魔になる。この辞書の記述には、研究者が不可解な謎を考究するように細部にこだわりすぎる部分があり、それが、

医学会の教科書から漢方医学に入った人たちにとっては、これもまた摩訶不思議な言葉であろう。

この問題を解決してくれる辞典が登場した。それが本書である。これまでも、中医学用語を解説する良い辞書は存在した。例えば、創医学術部主編『漢方用語大辞典』(徳原書店1984)は約一万七千字の用語について凡そ百にのぼる語文を網羅して作成されており、漢方用語辞典としての標準的な内容を持っている。また学習研究社の『図説東洋医学・用語編』(1988)は、東洋医学の全領域から基本用語五千余項目を抽出して作成されており、これも充実した内容である。さて、この『中医基本用語辞典』はどのような辞典なのであろうか。先の先輩辞書たちに比べて、どのような特色を持つて



『中医基本用語辞典』

